彦根市埋蔵文化財調査報告 第15集

馬　場　遺　跡

―― 彦根市日夏町字上大形所在 ――

昭和63年 3 月

彦根市教育委員会

馬場遺跡
昭和63年3月
彦根市教育委員会

序

彦根市は、市制施行以来、半世紀の年輪が刻みこまれた記念すべき年を契機として、新たな半世紀に向っての第1歩を踏み出しました。21世紀の新しい時代に向い、社会的変化はますます加速度が加わるものと予想されます。こうした中で当市教育委員会は、「人づくり」を最大の課題として、時代をリードし、なおかつ大地にしっかりと根を下ろした人間を形成するため、生涯教育についての方向性を大きく打ち出していかなければならないものと考えております。この様な意味で過去の人々の英知をいかに引き継いで行くのかは、今後ますます重要な課題であると言えましょう。

今回発掘調査を実施しました馬場遺跡は、弥生時代中期の資料を純粋な形で私達の眼前に見せてくれました。今後この地域の歴史を考える上で貴重な資料になるものと考えられます。彦根市における考古学的資料はまだまだ少なく、今後も調査を進めて行く所存でありますので一層のご支援をお願いいたします。

最後になりましたが、この調査にご理解をたまわり多大なご協力をいただきました田中商事株式会社に対しましては厚くお礼をのべるとともに、ご協力をいただきました関係の皆様方にも深く謝意を表するしだいであります。

昭和63年3月

彦根市教育委員会

教育長　河　原　保　男

例　　言

1．本書は、彦根市日夏町字上大形3729他に所在する馬場遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、宅地造成工事に先だち、（株）田中商事の委託を受けて彦根市教育委員会が実施したものである。

3．本調査の事務局は次のとおりである。

彦根市教育委員会社会教育課

課長	安　沢　　進
課長補佐兼庶務係長	尾　本　吉　史
文化財係長	国　定　信　夫

4．現地調査および整理・報告は社会教育課技師本田修平が担当した。

5．現地調査および整理・報告等の作業は次の構成で実施した。

調査作業員　出口加寿夫・西村　昭三・辻　　勘次・出口美代子・疋田千鶴子
若林みつ子・森　ひさ子・西村　梅野・田中　敏江・高仁寿美子
寺村きみ子・寺村さた子・寺村　まつ・古川　　久・出口　房江
竹中　美代

整理作業員　大西　裕子・小堀真由美・伏木　和子　　以上敬称略

6．本調査で出土した遺物および資料は当教育委員会が保管している。

★目　　次★

1. はじめに …… 3
2. 位置と環境 …… 3
3. 調査の結果 …… 5
4. まとめ …… 9
5. 出土遺物観察表 …… 11
図版1　調査地点と周辺の遺跡 …… 17
図版2　トレンチ配置図 …… 18
図版3～7　遺構図 …… 19
図版8～13　出土遺物実測図 …… 24
図版14～19　出土遺物写真 …… 30
図版20～24　遺構写真 …… 36

1. はじめに

馬場遺跡は、県立河瀬高等学校新設に伴ない昭和57年度に県教育委員会文化財保護課の指導で（財）滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施している遺跡である。その後市内遺跡分布調査で遺跡の範囲が日夏町まで広がっている事が確認されていたものである。当遺跡周辺は数回の試掘調査を実施したが、礫層・スクモ層を確認したのみにとどまっていた。

昭和62年10月に、（株）田中商事の宅地開発計画に基づく事前審査が提出された。当市教育委員会では該当地が馬場遺跡の範囲内である事が予想されたため、この段階で周知の遺跡の範囲であり予定通り開発を実施する場合は文化財保護法に基づく手続きが必要であるとともに事前の調査が必要である旨回答した。その後、昭和62年10月15日付けで文化財保護法第57条に基づく埋蔵文化財発掘届及び発掘調査依頼が当教育委員会に（株）田中商事から提出され、協議に入った。この結果、開発予定地約25,000㎡あり、遺物の散布状況より全面に遺跡が広がっているとは考えにくいため、先ず試掘調査を実施し、遺跡の範囲を把握して調査計画を立てる事とした。当市教育委員会では協議結果に基づき、同年10月20日付け彦教委社第1068号で発掘届の進達および発掘調査通知を県教育委員会に提出した。

試掘調査は、同年11月７日に（株）田中商事代表取締役田中一郎氏立会のもとに実施した。試掘トレンチは、ほぼ２×２ｍのものを重機にて計20ケ所設定して、遺構および包含層の有無等遺跡の広がりを見たわけであるが、開発予定地の東の市道側約 $\frac{1}{5}$ が遺跡の範囲である事が確認できた。この調査結果に基づき、発掘調査計画を立て、（株）田中商事と再度協議し、昭和62年11月24日付で馬場遺跡発掘調査に係る委託契約を結ぶに至った。

彦根市教育委員会では、この委託契約に基づき昭和62年12月１日より現地の発掘調査を実施した。

2. 位置と環境

馬場遺跡の今回の調査地点は、日夏町・清崎町・川瀬馬場町の境に位置している。日夏町は、旧朝鮮人街道に沿って広がっており、宇曽川と犬上川の沖積地に立地しており、西側には琵琶湖岸の独立丘陵である荒神山が宇曽川をいだく様に存在している。中世の日夏は、荒神山東側の山裾から宇曽川に沿って集落が広がっていた事が近年の古屋敷遺跡や宇

曽川改修工事に伴なう妙楽寺遺跡の発掘調査で明らかになりつつある。荒神山東方の尾根に日夏城があったと言われることや、琵琶湖から宇曽川に至る水運の利用等がその立地の有力な要因であったと考えられる。彦根市史の日夏古屋敷絵図は集落中央を宇曽川が流れていた様子が描かれているのはこの様な事情を物語っていると思われる。戦国時代末には日夏城が落城したと伝えられるとともに、江戸時代における朝鮮人街道の整備が現在地における日夏の形成契機になったと思われる。日夏町周辺は湖岸に近い沖積地であるため地下水位が現在でも高いが、古代から低湿地の発達した地形であったらしく、各所に湿田があったとともに湧水が多い。この様な地形は弥生時代における初期農耕の水田開発においては非常に有利な条件であった。ほ場整備および宇曽川改修に伴なって発掘調査された妙楽寺遺跡は確実に弥生時代中期まで遡れる資料が出土しており、この時代以降平安時代に至る複合遺跡であるとともに、一部は前述した様に戦国時代末期まで続く集落跡であった。また、馬場遺跡は、その大部分が川瀬馬場町に所在し、県立河瀬高等学校用地がその中心になると考えられ、河瀬高等学校新設に伴ない県教育委員会の指導のもとに（財）滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し、弥生時代中期後半のピットを中心とする掘立柱建物跡を多数検出し、集落跡である事が明らかになった遺跡である。現在、荒神山の東側を屈曲して流れる宇曽川は、地図で見るとデルタの発達が見られないのであるが、荒神山と湖岸の間には曽根沼・野田沼の内湖があり、この内湖をかいして琵琶湖とつながっていたと考えられる。この内湖周辺に弥生時代前期の遺跡が存在しても不思議ではなく、一つの可能性として考える必要がある様に思われる。

湖岸の独立丘陵たる荒神山には、古墳時代の後期群集墳が現在確認できているもので25基築かれているが、現在でも多くの社寺をその山域の中にもっており、そこには聖域としての歴史をかいま見る事ができよう。古代末における東大寺荘園覇流圧もこの荒神山をシンボルとする地域で展開された歴史のひとこまであろう。

中世においては、近江の国は佐々木氏が守護職として権勢をふるうわけであるが、中世後半のこの地は江南の六角氏と江北の京極氏の政争の場として戦乱がくり返えされた。日夏氏は江南六角氏につかえる土豪として荒神山東側の尾根に城館をかまえていた事は前記したとおりである。

この地域は、荒神山を地域的なシンボルとしていたと考えられ、宇曽川を主要な河川とし、江戸時代に朝鮮人街道として整備された巡礼街道が湖岸付近の主要街道であり、この水陸の交通路を中心に歴史を形成してきたといえる。

県立河瀬高等学校建設に伴なって実施された馬場遺跡の発掘調査結果を1984年3月滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会発行の『馬場遺跡発掘調査報告書』からまと

めれば、以下の通りになる。遺構は、掘立柱建物14棟におよぶがその大部分のものは１間×１間・１間×２間もしくは２間×２間のもので10㎡前後の面積のもので、総数は14棟検出されている。この中の一部のピットには柱根が残っているものがあった。この他の遺構としては土坑が20ケ所検出されているが、その性格は不明である。また、溝および河川も確認されている。この様に、馬場遺跡は掘立柱建物跡を中心とする弥生時代中期後半の遺跡で、竪穴住居跡を含まない掘立柱建物群の集落としてあまり例のない資料であり、弥生時代の集落を考える上で非常に貴重な資料である。

3. 調 査 の 結 果

馬場遺跡は、試掘調査の結果その範囲がほぼ5,000㎡以内である事が確認できたため、この地域を調査範囲として、中央部に現況の田と並行して伸びるトレンチを「キ」字状に設定して確実な遺跡の範囲を確認する事を第一の目標とした。これは、この遺跡が沖積地の舌状の微高地に立地していると考えられたためで、試掘調査でも遺跡が確認できなかった所は、南および西側が砂礫層およびシルト層の沖積作用の結果形成された地形を示し、北側はスクモ層で低湿地であった事が考えられたためである。この「キ」の字状に設定したトレンチで遺構が検出できた場合はトレンチを増設して遺跡の性格を把握する事として調査を計画した。この結果、トレンチは計９ケ所になった。

基本的な土層は、耕作土が40㎝前後あり、第２層の床土は灰褐色粘質土層で10～20㎝あり、第３層は褐色砂礫土から褐灰色粘質土層になり遺構面になる。ただし、一部は、植物遺体混りの黒褐色粘土層になり、この部分は低湿地であったと考えられ無遺構であった。

以下、各遺構について述べてみたい。

〔掘立柱建物跡〕

各トレンチで検出できたピットは径10㎝のものから径１ｍ近い土坑と区別のつけにくいものまで多数検出しており、深さも平均で10㎝前後であり浅いものは５㎝のものまである。このため、不整形な形で建物跡とした場合、収拾がつかなくなるおそれがあるため、柱間がほぼ等距離（桁行の柱間と梁行の柱間は異なる場合が多い）をなし、かつ桁行と梁行の軸線が直交する事を原則とした。ただしピットが検出できなかった所やトレンチの外側に伸びる可能性が考えられる所もあり、一応の複元案としておきたい。

ＳＢ－1

1トレンチ南端で検出したもので、桁行2間・梁行2間のもので、柱穴は直径30cm前後のものであり、柱間は桁間2ｍで梁間1.4ｍであり、床面積は15.2m²である。主軸はＮ－53°－Ｅを計る。

ＳＢ－2

ＳＢ－1と重複するもので、桁行1間・梁行2間と考えられるもので、柱穴は直径30cm前後のものであり、床面積は9.68m²である。主軸はＮ－41°－Ｗを計るが、梁行はまだ伸びる可能性がある。

ＳＢ－3

ＳＢ－1・2と重複するもので、桁行1間・梁間2間と考えられるもので、柱穴は30cm前後の直径をもつものであり、柱間は桁間2.4ｍで梁間1.3ｍであり、床面積は6.24m²である。主軸はＮ－28°－Ｗを計るが、梁行はまだ伸びる可能性がある。

ＳＢ－4

ＳＢ－1の約1ｍ北側で検出したもので、桁行1間・梁行2間のもので、柱穴は直径30cm以下のものであり、柱間は桁間2.6ｍで梁間1.4ｍであり、床面積は7.28m²である。主軸はＮ－67°－Ｗを計る。

ＳＢ－5

ＳＢ－4の北側0.5ｍの所で検出したもので、桁行1間・梁行1間のもので、柱穴は直径30cm以下のものであり、柱間は桁間2.6ｍで梁間1.4ｍであるが、ＳＢ－4と同規模のものと考えられ、1間×2間のものと考えられる。主軸はＮ－51°－Ｗを計る。

ＳＢ－6

2トレンチ東側で検出したもので、現状では1間×2間のものであるがトレンチ外に伸び桁行2間・梁行2間と考えられ、柱穴は30cm前後の直径をもち、柱間は桁間1.5ｍで梁間は2ｍのものである。主軸はＮ－66°－Ｅを計る。

ＳＢ－7

ＳＢ－6と重複するもので、現状では1間×1間であるが、トレンチ外に伸び桁行1間

・梁行２間の建物と考えられ、柱穴は直径30cm前後のものであり、柱間は桁間2.2ｍで梁間1.7cmである。主軸はＮ－45°－Ｅである。

ＳＢ－8

ＳＢ－７の西側1.5ｍの所で検出したもので、現状で２間×１間であるが、この建物もトレンチ外に伸び桁行２間・梁行２間と考えられ、柱穴は30cm前後で、柱間は桁間1.1ｍで梁間1.5ｍである。主軸はＮ－19°－Ｅである。

ＳＢ－9

ＳＢ－８の西側２ｍの所で検出したもので、桁行２間・梁行２間で、柱穴は30cm以下のもので　、柱間は1.5ｍのものである。ただし、この建物もトレンチの外に伸びる可能性があるが現状で９㎡で、主軸はＮ－48°－Ｅである。

ＳＢ－10

ＳＢ－９とかさなるもので、現状で１間×２間であるがトレンチ外に伸びると考えられ桁行２間・梁行２間の建物であろう。柱穴は40cm以下で、柱間は1.4ｍである。主軸はＮ－54°－Ｅである。

ＳＢ－11

ＳＢ－10西側に隣接するもので、現状では１間×２間であるがトレンチ外に伸び桁行２間・梁行２間のものであろう。柱穴は30cm前後のもので、柱間は桁間１ｍで梁間1.7ｍのものである。主軸はＮ－60°－Ｅである。

ＳＢ－12

ＳＢ－11西側に接して検出したもので、現状で１間×３間のもので、柱穴は30cm前後で、柱間は１ｍであるが、トレンチ外に伸びる。主軸はＮ－23°－Ｅである。

ＳＢ－13

３トレンチで検出できたもので、桁行１間で梁行２間のもので、柱穴は最大50cmの直径をもち、柱間は桁間2ｍ・梁間1.5ｍ、床面積は６㎡である。主軸はＮ－20°－Ｅである。

ＳＢ－14

4トレンチ南端で検出できたもので、桁行1間・梁行2間のもので、柱穴は50cm前後のもので、柱間は桁間2ｍで梁間1.3ｍあり、床面積は5.2㎡である。主軸はＮ－42°－Ｅであった。

ＳＢ－15

ＳＢ－14の北側3ｍの所にあり、桁行1間で梁行2間のもので、柱穴は50cm以下であり、柱間は桁間2.4ｍで梁間1.5ｍあり、床面積は7.2㎡を計る。主軸はＮ－61°－Ｗである。

ＳＢ－16

ＳＢ－15の北側に隣接して検出したもので、桁行2間で梁行2間、柱穴は最大50cmあり、柱間は桁間1.4ｍで梁間1.6ｍあり、床面積は11.76㎡を計る。主軸はＮ－69°－Ｅである。

ＳＢ－17

5トレンチ南端で検出したもので、現状で1間×2間であるがトレンチ外に伸びて桁行2間で梁行2間と考えられ、柱穴は50cm前後で、柱間は桁間1.3ｍで梁間2ｍである。主軸はＮ－43°－Ｗである。

ＳＢ－18

ＳＢ－17の北側2ｍの所にあり、桁行1間で梁行2間あり、柱穴は30cm前後で、柱間は桁間1.8ｍで梁間1.4ｍで、床面積は5.24㎡を計る。主軸はＮ－28°－Ｅである。

ＳＢ－19

5トレンチ北端で検出したもので現状で1間×1間であるがトレンチ外に伸び桁行1間で梁行2間と考えられ、柱穴は30cm前後あり、柱間は桁間1.4ｍで梁間1ｍである。主軸は、Ｎ－40°－Ｅである。

ＳＢ－20

6トレンチ南端で確認したもので、桁行1間で梁行2間であり、柱穴は40cm以下であり、柱間は桁間2.3ｍで梁間1.5ｍあり、床面積は6.9㎡を計る。主軸はＮ－40°－Ｅである。

ＳＢ－21

ＳＢ－20と重なるもので、桁行２間で梁間２間であり、柱穴は最大60cmで、柱間は桁間2.3ｍで梁間2.6ｍあり、床面積は23.92㎡を計る。主軸はＮ－52°－Ｗである。

〔土坑〕

土坑は各トレンチで１ｍ前後の円形のもの、長径1.5ｍ前後の楕円形のもの、また方形のもの等検出されているが、深さ10～20cmと浅く、井戸や土坑墓等は考えにくいものであり、その性格は不明である。また、浅い地形のくぼみに包含層の土が溜ったものもあると考えられる。

２Ｔ東端部では、現状で直径７ｍほどのＳＸ－１を検出した。このＳＸ－１は深さ40cmあり、東側には甕が多量に破棄されていたが、中の土は植物遺体の混った黒灰色砂質土であり、集落内に残された湿地状の落ち込みであると考えられる。

〔溝〕

溝は、遺跡の西端でＳＤ－３・ＳＤ－４・ＳＤ－５の３本が検出されている。この３本の溝は交わり結果的に１本になるもので、２段の段掘りがなされており人工の溝と考えられる。この溝の中からは、鍬・弓・高坏等の木製品や獣骨等が出土している。

4. ま　と　め

以上の様に、今回の馬場遺跡の発掘調査では掘立柱建物跡21棟・土坑・溝等を検出したが、この調査結果から考えられる遺跡の性格を考えてみたい。

馬場遺跡は、沖積地の低湿地に囲まれた極低い微高地に立地するもので、今回の調査地北側の中央部で無遺構のスクモ混りの黒褐色粘土層が検出されており、集落内にも低湿地が広がっていたことが想像される。また、溝の掘り込み中には湧水に悩まされた事等から地下水位も高かったものと考えられ、これらの水を抜くために溝が掘られていたものと考えられる。ピットが掘られている地山は遺跡中央部は黄褐色粘質土であったが、周辺部に行くと砂質土から礫混り土に変わり、地下水位が高かった事とあいまって良好な生活環境とは言いがたい。このため、竪穴式住居では湿気が強く、立地的にむいていなかったと考えられ、この事から平地式または高床式の住居を基本的な形態としていたと考えられる。

出土遺物は、石斧・砥石の石製品、鍬・弓・高坏等の木製品、土器が主である。土器は

県教育委員会が県立河瀬高等学校建設時に実施した発掘調査の結果と同様第Ⅲ・Ⅳ様式の中期後半だけのものであったが、建物の重複から遺構的には3時期あったと考えられる。この集落は、この時期だけであり以降には続かなかったのであり、極限られた時期だけで廃絶してしまったのも前記した地形的な条件と密接な関係があるものと考えられる。

弥生時代中期における掘立柱建物だけの集落跡の資料はまだまだ少なく、今後この様な地形的条件の所の調査が進むと資料が増加するものと考えられるが、イメージとしては南方の水上住居的なものが考えられるのではないだろうか。弥生時代においてもこの様な住居様式を考慮しておく必要があるだろう。

5. 馬場遺跡出土遺物観察表

番号	種類 器形	法量	形態	調査	土・色調・焼成	備考
1	弥生式土器 壷	口径9.7cm 器高20 cm	○口縁部は、しまった頸部より一旦外彎して開き、すぐ強く内彎して立ち上がり、端部を面取りしておさめる。 ○体部は、しまった頸部より肩はあまり張らず中位部にある最大腹径部に至り、やや小さな底部まで上下ほぼ対称に作られる。 ○底部は平底である。	○口縁部は、内外面ともに横ナデ調整。 ○頸部外面は密なヘラ磨き調整で、内面はしぼり痕を残して調整。 ○体部外面は密なヘラ磨き調整で、内面はヘラ削り調整。	胎土：良好 色調：灰黄色 焼成：やや硬	5 T SX−5−1 出土
2	弥生式土器 壷	口径 12 cm	○同　上	○口縁部は、内外面ともに横ナデ調整。 ○頸部外面は粗いハケ調整で、内面は横方向の粗いハケ調整。 ○体部外面は粗いハケ調整であるが、内面は器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：淡灰褐色 焼成：やや軟	2 T 2X−2−1 出土
3	弥生式土器 壷	口径 9.7cm	○口縁部は頸部より外彎して開き上半部を上方に折り曲げ、端部を丸くおさめた口縁帯を作り、外面に弱い凹線を入れる。 ○肩部はあまり張らない。	○頸部から口縁部は横ナデ調整。 ○肩部外面はハケ調整であるが、内面は器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：明赤褐色 焼成：やや硬	2 T SD−2−3 出土
4	弥生式土器 壷	口径 22 cm	○口縁部は、しまった頸部から外彎して開き、上半部を上方に折り返し端部を面取りしておさめる。	○口縁部は、内外面ともに横ナデ調整。 ○頸部外面はヘラ磨き調整で、内面は器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：暗赤褐色 焼成：やや軟	2 T SX−2−1 出土
5	弥生式土器 壷	口径22.9cm	○口縁部は、しまった頸部より外彎して開き上半部を上方に折り返し端部を面取りしておさめ、外面に凹線を2条入れその間に波状文を入れる。 ○頸部外面に列点文を入れた凸帯をほどこす。 ○肩部はやや張っている。	○口縁部は内外面ともに横ナデ調整。 ○頸部外面は粗いハケ調整で、内面は横方向の粗いハケ調整。 ○肩部は、外面粗いハケ調整で内面は器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：暗赤褐色 焼成：やや軟	9 T SD−9−5 出土
6	弥生式土器 壷		○口縁部は外彎して開き、上面に2条の列点文を入れる。 ○頸部はしまっていない。	○口縁部は横ナデ調整。 ○頸部は外面粗いハケ調整で、内面は横方向の粗いハケ調整。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：硬	8 T SD−8−3 出土

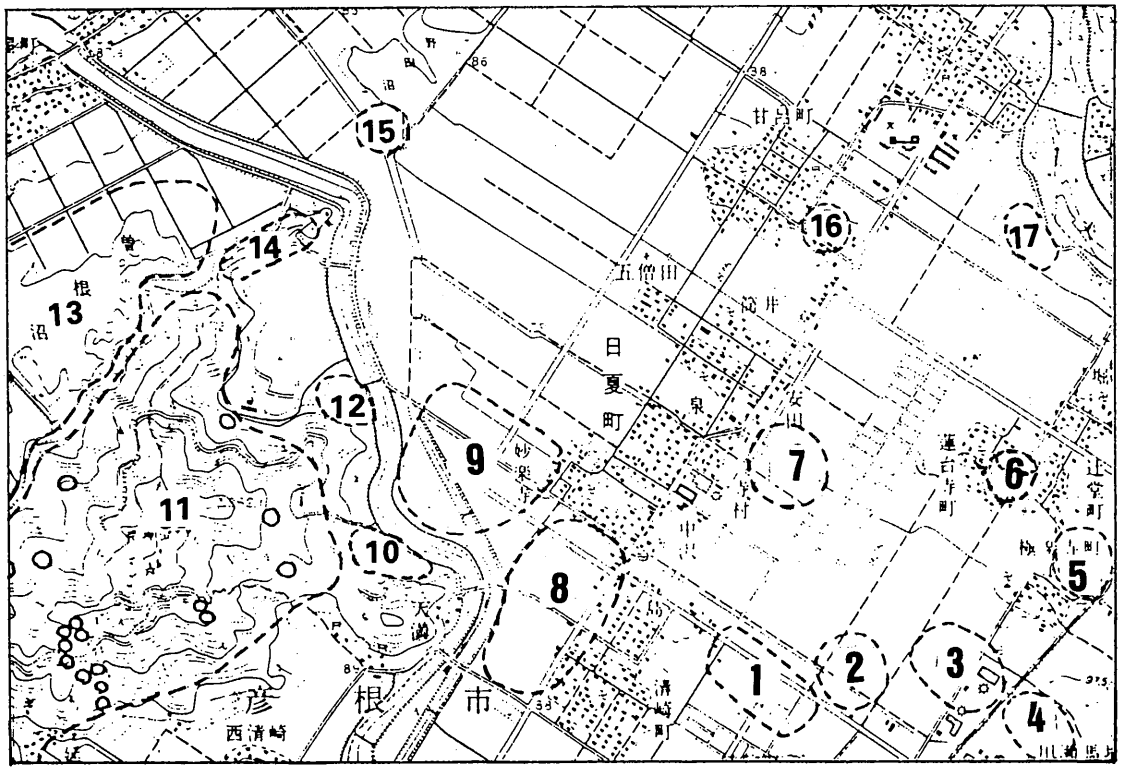
番号	種類 器形	法量	形態	調整	土・色調・焼成	備考
			○体部は最大腹径が中位部にあり上下対称のものと思われ、上部に列点文を3ケ所ほどこし、その間に並行波線と斜格子文を入れる。	○体部は内外面ともに粗いハケ調整。		
7	弥生式土器 甕	口径22.6cm	○口縁部は上方に折り曲げ、3ケ所の山型口縁を作り、端部外面と折り曲げ部外面に刻みを入れ、口縁部外面にはヘラ状の工具による刺突文を入れる。 ○体部は、あまり張らない肩部より腹部に至り、最大腹径は中位部と思われる。	○口縁部外面は粗いハケ調整で、内面は横方向の粗いハケ調整であり、端部はナデ調整。 ○体部外面は粗いハケ調整で、内面はナデ上げ調整と思われる。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：硬	2T SX−2−1 出土
8	弥生式土器 甕	口径23cm	○口縁部は上方に折り曲げて外面下方をやや垂下ぎみにし、口縁帯を作り、4ケ所の山型口縁と口縁帯下面には刻みを入れる。 ○体部は、あまり張らない肩部より腹部に至り、最大腹径は中位部と思われる。	○口縁部外面は斜方向の粗いハケ調整で、内面は横方向の粗いハケ調整であり、端部はナデ調整。 ○体部外面は粗いハケ調整であるが、肩部に横方向のハケ調整を入れ、内面はナデ上げ調整と思われる。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：硬	2T SX−2−1 出土
9	弥生式土器 甕	口径21.2cm	○口縁部は、あまりしまらない頸部より外彎して伸び上部を弱く折り曲げる。 ○体部は、あまり張らない肩部より腹部に至り、最大腹径は中位部と思われる。	○口縁部外面は斜方向の粗いハケ調整で、内面は横方向の粗いハケ調整であり端部はナデ調整。 ○体部外面は粗いハケ調整であるが、肩部には横方向のハケ調整を入れ、内面はナデ上げ調整と思われる。	胎土：良好 色調：褐灰色 焼成：やや硬	7T P−7−1 出土
10	弥生式土器 甕	口径21.6cm	○口縁部は、ややしまった頸部から外彎して開き上部を折り曲げ、端部を弱く面取りしておさめる。 ○体部は、あまり張らない肩部より腹部に至り、最大腹径は中位部と思われる。	○口縁部外面は斜方向の粗いハケ調整で、内面は横方向の粗いハケ調整であり、端部はナデ調整。 ○体部外面は、縦方向の粗いハケ調整をほどこし、その後頸部から肩部にかけて横方向のハケ調整を入れる。 ○体部内面はナデ上げ調整と思われる。	胎土：良好 色調：褐灰色 焼成：硬	2T SX−2−1

番号	種類 器形	法量	形態	調整	土・色調・焼成	備考
11	弥生式土器 甕	口径18.8cm 器高23.6cm	○口縁部は、ややしまった頸部より外彎して開き上部を折り返し端部を弱く面取りしておさめる。 ○体部は、あまり張らない肩部より中位にある最大腹径部になり、そのままやや小さい平底の底部に至る。	○口縁部は、外面斜方向の粗いハケ調整で、内面は横方向の粗いハケ調整。 ○頸部は外面粗いハケ調整で、内面横方向の粗いハケ調整。 ○体部は、斜方向の粗いハケ調整後上半部に横方向のハケ調整を入れ、内面はナデ上げ調整と思われる。	胎土：良好 色調：灰黄色 焼成：硬	2T SX−2−1 出土
12	弥生式土器 甕	底部径3.9cm	○小さな平底の底部より体部は外傾して開く。	○外面は密なハケ調整で、内面はハケ調整後ナデ上げ調整。	胎土：良好 色調：灰黄色 焼成：硬	8T SD−2−1 出土
13	弥生式土器 甕	口径32.8cm	○口縁部は、頸部より外反して開き上部を上方に折り返し端部を面取りしておさめる。 ○肩部はあまり張らない。	○口縁部外面は斜方向の粗いハケ調整で、内面は横ナデ調整。 ○頸部は外面縦方向の粗いハケ調整で、内面は横方向の粗いハケ調整。 ○肩部は外面縦方向の粗いハケ調整の後に横方向のハケ調整をほどこし、内面は不明。	胎土：やや砂粒を含むが良好 色調：淡灰黄色 焼成：やや硬	2T SD−2−1 出土
14	弥生式土器 甕	口径 24 cm	○口縁部は、頸部より鋭角に外傾して開き、外面をやや厚手に作り、端部を強く面取りして断面三角形にしておさめる。 ○肩部はやや張り、上位部にある最大腹径部に至り、そこからよくしまった底部へと続く。 ○肩部に2条の凹んだ円形の文様をちどり状にめぐらす。	○口縁部は、内外面ともに横ナデ調整。 ○体部は外面粗いハケ調整をほどこし、内面は、肩部が斜方向のヘラ削り調整で、それから下は下から上方向へのヘラ削り調整。	胎土：良好 色調：灰黄色 焼成：硬	9T SD−9−5 出土
15	弥生式土器 甕	口径17.6cm	○口縁部は、「く」の字状に外反して開き、端部を断面三角形に強く面取りしておさめる。 ○肩部はあまり張らず、上位に位置する最大腹径部に至り、そこからよくしまった底部へと続く。	○口縁部は内外面ともに横ナデ調整。 ○肩部から腹部上半部にかけては、やや粗いタタキ調整をほどこし、その後ハケ調整をする。 ○体部内面は、器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：やや軟	3T SD−3−3 出土

番号	種類 器形	法量	形態	調整	土・色調・焼成	備考
16	弥生式土器 甕	口径15.5cm	○口縁部は、「く」の字状に外反して開き、端部を断面三角形に強く面取りしておさめる。 ○肩部はあまり張らず、上位部に位置する最大腹径部に至る。	○口縁部は、内外面とも横ナデ調整。 ○体部は、内外面ともにハケ調整。	胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：軟	2T SD−2−3 出土
17	弥生式土器 甕	口径29.6cm	○口縁部は、「く」の字状に内彎ぎみに開き、外面をやや厚く作り、端部を断面三角形に強く面取りしておさめる。 ○端面をヘラ状工具で刺突して刻み、外面を同様の工具で三角状に刻む。 ○体部は、やや張った肩部より上位部にある最大腹径部に至るが、この腹部は強く張っている。	○口縁部は、内面横方向のハケ調整で、外面斜方向の粗いハケ調整。 ○体部は上2／3まで粗いタタキ調整をほどこし、その後このタタキ痕と直交する様に粗いハケ調整を行なう。 内面は、ハケ調整後ナデ上げ調整か。 ○体部外面下1／3は粗いハケ調整。	胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：やや硬	3T SD−3−3 出土
18	弥生式土器 鉢	口径19.2cm	○口縁部は、外傾して立ち上がる体部より強く内彎して端部を丸くおさめる。 ○口縁部外面に4条の凹線文を入れる。 ○小さな刺突穴を1穴有する。	○内外面ともに横ナデ調整と考えられるが、内面は器表剥脱。	胎土：良好 色調：乳灰黄色 焼成：やや軟	2T SD−2−4 出土
19	弥生式土器 高坏	口径15.2cm	○内彎しながら立ち上がる体部より、一端を強く外側に引き出し、もう一端を「受け部」状に内傾して引き出し端部を丸くおさめる。	○体部は器表が剥脱しているが、内外面ともにヘラ磨き調整と思われる。 ○口縁部は内外面ともに横ナデ調整。	胎土：良好 色調：茶褐色 焼成：やや軟	3T SD−3−3 出土
20	弥生式土器 脚部	脚部径 13.1cm	○水差し型土器の脚部と考えられ、端部をしっかりした断面三角形に作る。 ○体部との接点外面に6条の凹線文をほどこす。 ○底部は充塡痕跡が見られないことから、抜けていたものと考えられる。	○端部は横ナデ調整。 ○脚部内面下半分はヘラ削り調整で、上半分はヘラ磨き調整であるが、外面は器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：乳白色 焼成：軟	3T SD−3−3 出土
21	弥生式土器 脚部	脚部径 11.2cm	○端部外面を強く引き出し、断面三角形に作る。 ○脚部に現状で3穴の透かしを穿つが、非対称である。	○端部は横ナデ調整。 ○脚部内面下半分はヘラ削り調整で、上半分はヘラ磨き調整であるが、外面は器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：軟	2T SD−3−3 出土

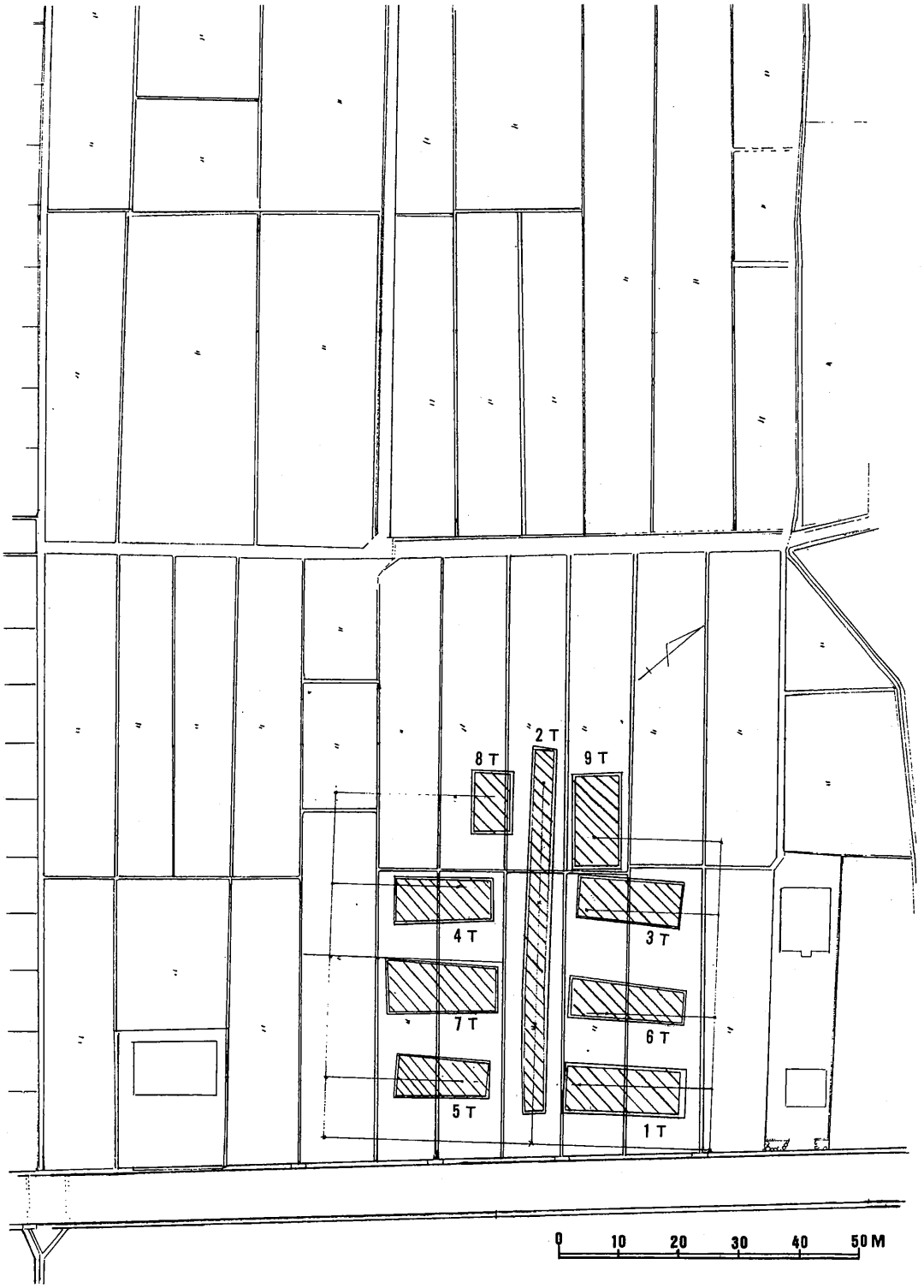
番号	種類 器高	法量	形態	調整	土・色調・焼成	備考
22	弥生式土器 脚部	脚部径 14.7cm	○端部は強く面取りをして平におさめ、脚部は「ロート」状に立ち上がる。 ○脚部上半部には現状で1穴の小さな透かしを穿つ。 ○透しの上下にヘラ状の工具で並行沈線を入れて区画し、その中に三角形を基本とする沈線文を入れる。 ○沈線文の下に列点文を入れる。	○内外面器表剥脱のため調整法不明。	胎土：若干の砂粒を含むが良好 色調：黄褐色 焼成：軟	2T SD−2−3 出土
23	弥生式土器 脚部	脚部径 11.7cm	○脚部は、「ロート」状に開き端部を丸くおさめる。 ○脚部と体部の接点内面に底部のとれた痕跡を残す。 ○端部外面に「爪型文」状の文様を入れる。	○内外面ともに器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：乳白色 焼成：軟	3T SD−3−3 出土
24	石斧	刃巾5.1cm	○蛤刃石斧で砂岩系の石材を用いている。			3T SD−3−3 出土
25	砥石		○現状で4面の使用面が見られる。 ○石材は、砂岩系と思われ、粒子はなめらかである。			8T SD−8−3 出土
26	砥石		○現状で3面の使用面が見られる。 ○石材は、砂岩系と思われ、粒子はやや粗い。			2T SX−2−1 出土
27	用途不明 木製品	長さ25cm 巾 8.5cm 厚さ 2cm	○全体は砲弾型をなし、巾5mm前後の枠どりをし、片面はそのままであるが、他の面に左右対称の彫り込みをほどこす。 ○この面に左右対称に7つの穿穴を有する。			3T SD−3−3 出土
28	三つ手鍬		○三本刃の鍬と考えられ、柄の着装部はやや厚手に作られる。			9T SD−9−4 出土
29	鍬		○先端部を薄く作られた鍬で、柄の着装部に般型突起を作る。			9T SD−9−4 出土

番号	種類器高	法量	形態	調整	土・色調・焼成	備考
30	スコップ状木製品		○全体的に丸く作られており浅い凹みを持ち柄は極めて短かくやや厚手になっている。 ○部分的に焼けている。			9T SD-9-4 出土
31	高坏		○脚部は円ではなくやや楕円形に近い。 ○脚柱部はやや傾いている。 ○坏部は薄手に作られている。 ○脚部は未製品と思われ、削り痕が荒くのこる。			9T SD-9-4 出土
32	弓状木製品		○彎曲した外側を平に削った丸木弓で、弦を張る弭は削り出している。 ○節はていねいに削っている。			9T SD-9-4 出土

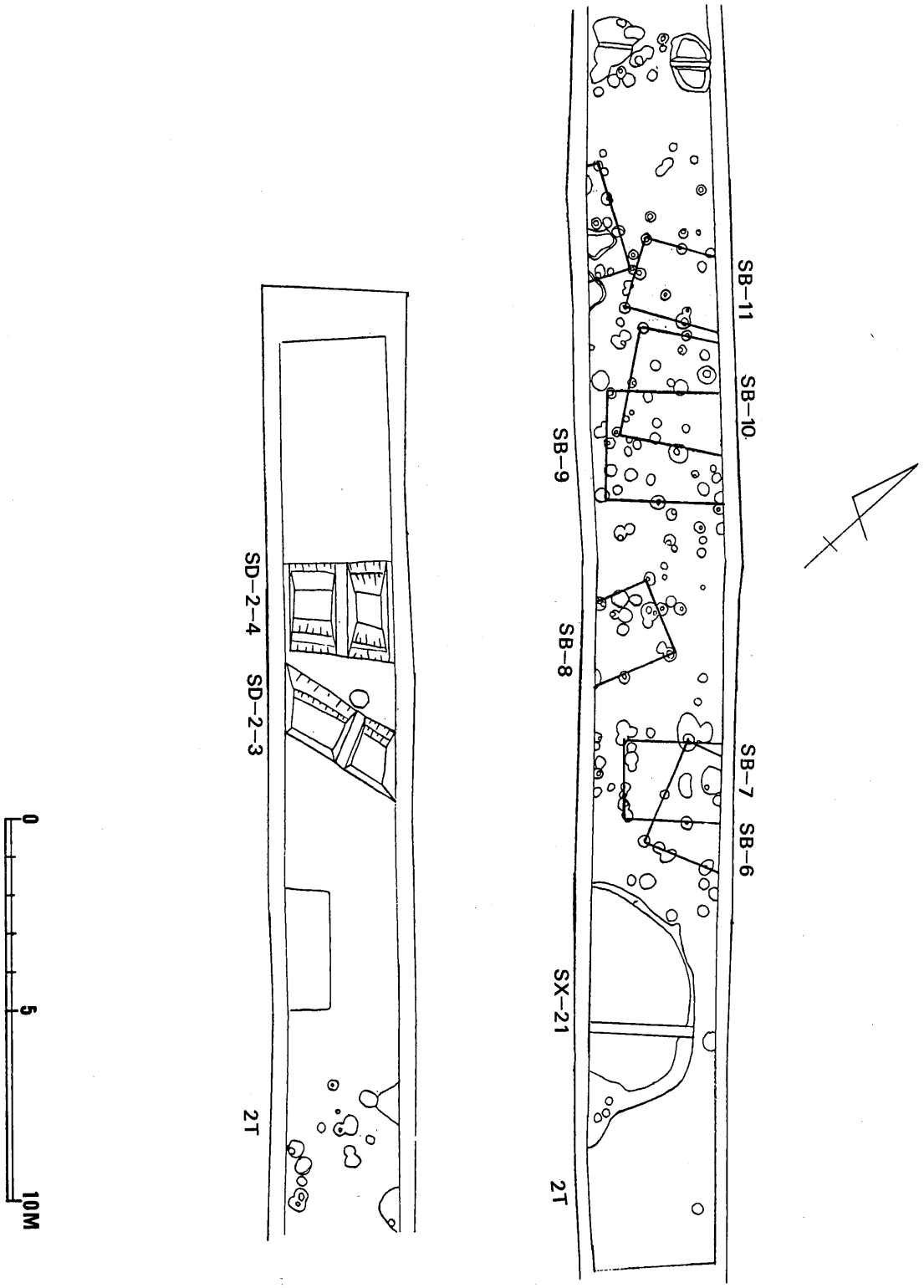


図版１　調査地点と周辺の遺跡

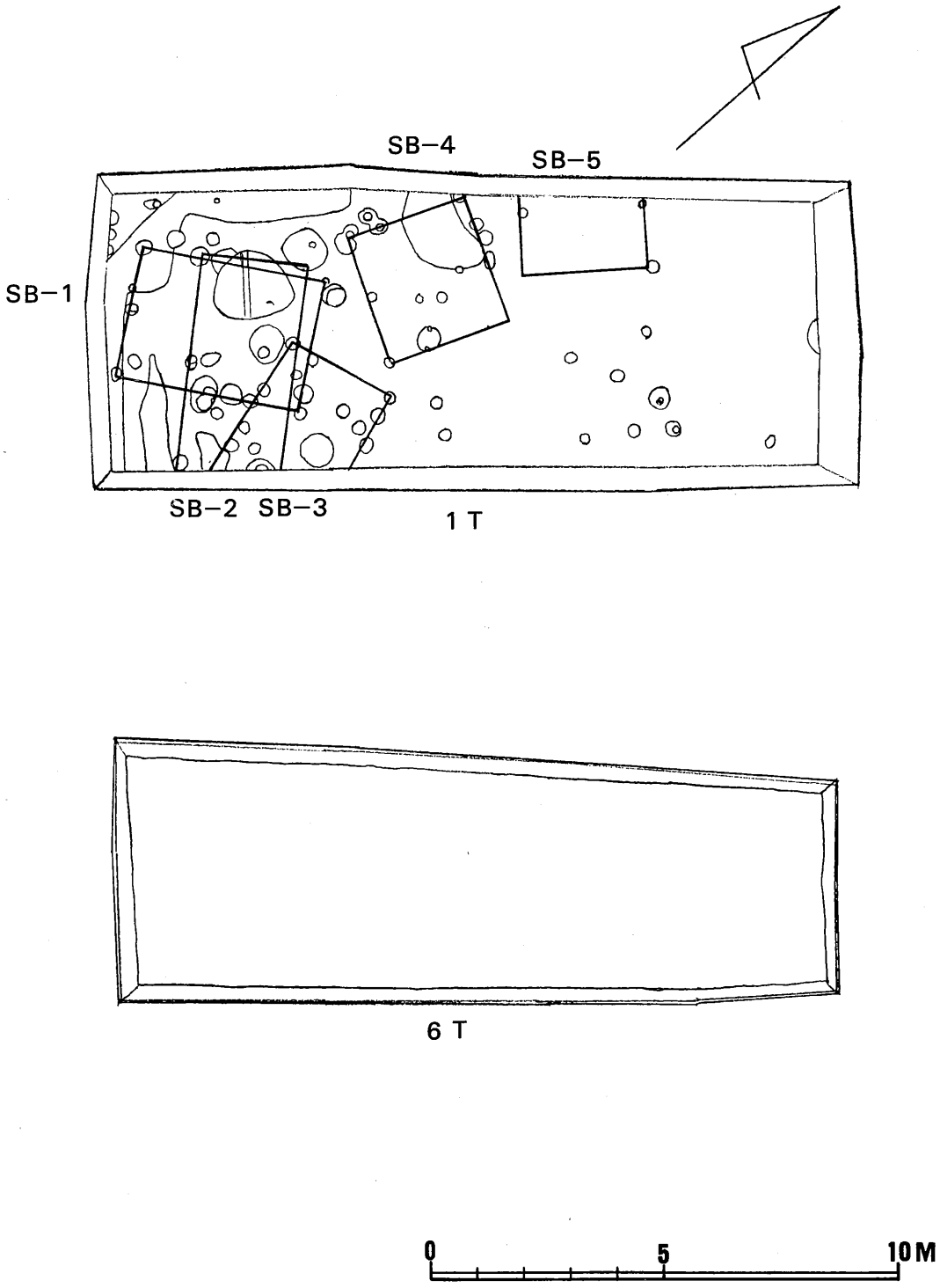
1	馬場遺跡（今回の調査遺跡）	10	南谷遺跡
2	鶴ケ池遺跡	11	荒神山古墳群
3	杉田遺跡	12	古屋敷遺跡
4	西海道遺跡	13	曽根沼遺跡
5	辻ノ東遺跡	14	日夏城跡
6	蓮台寺遺跡	15	野田沼遺跡
7	寺村遺跡	16	甘呂遺跡
8	蛭目遺跡	17	上沢尻遺跡
9	妙楽寺遺跡		



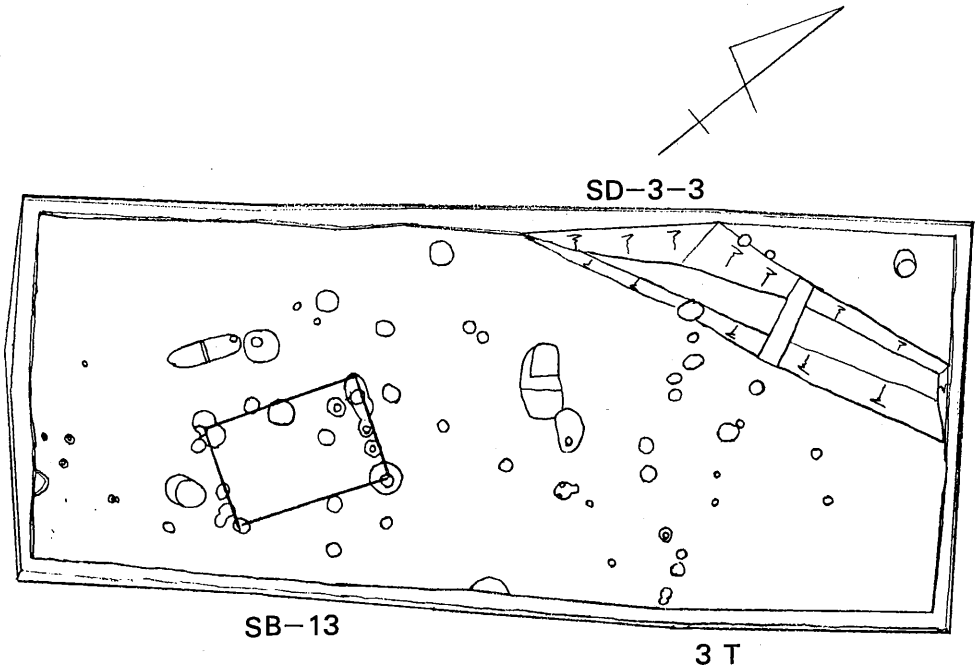
図版２　馬場遺跡トレンチ配置図

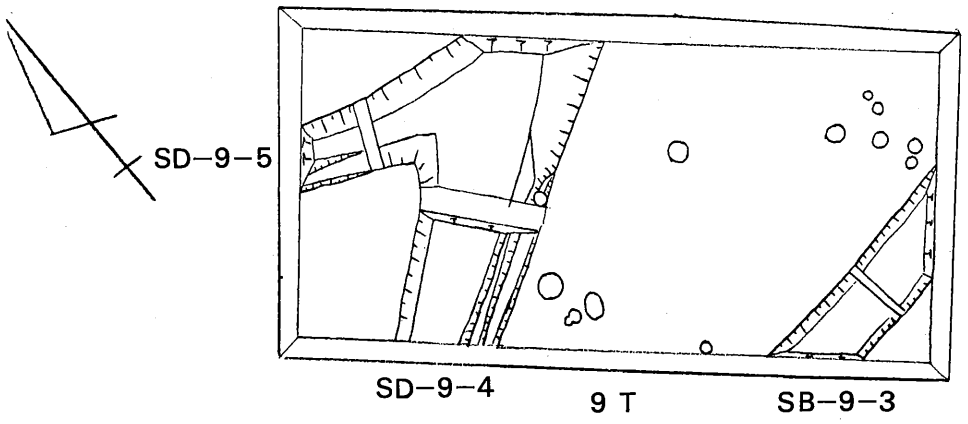


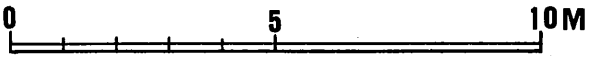
図版３　馬場遺跡２トレンチ遺構図



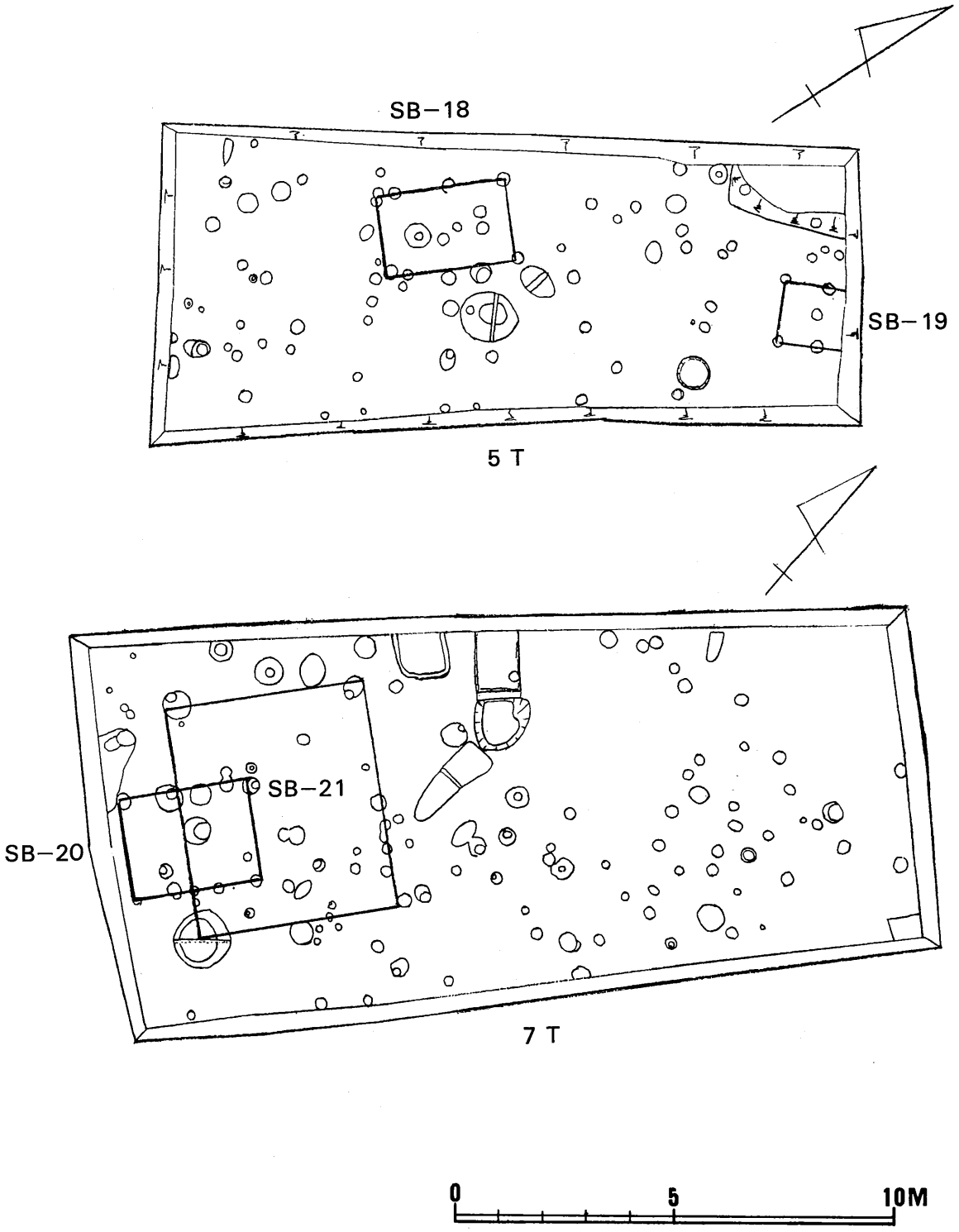
図版４　馬場遺跡 1･6 トレンチ遺構図



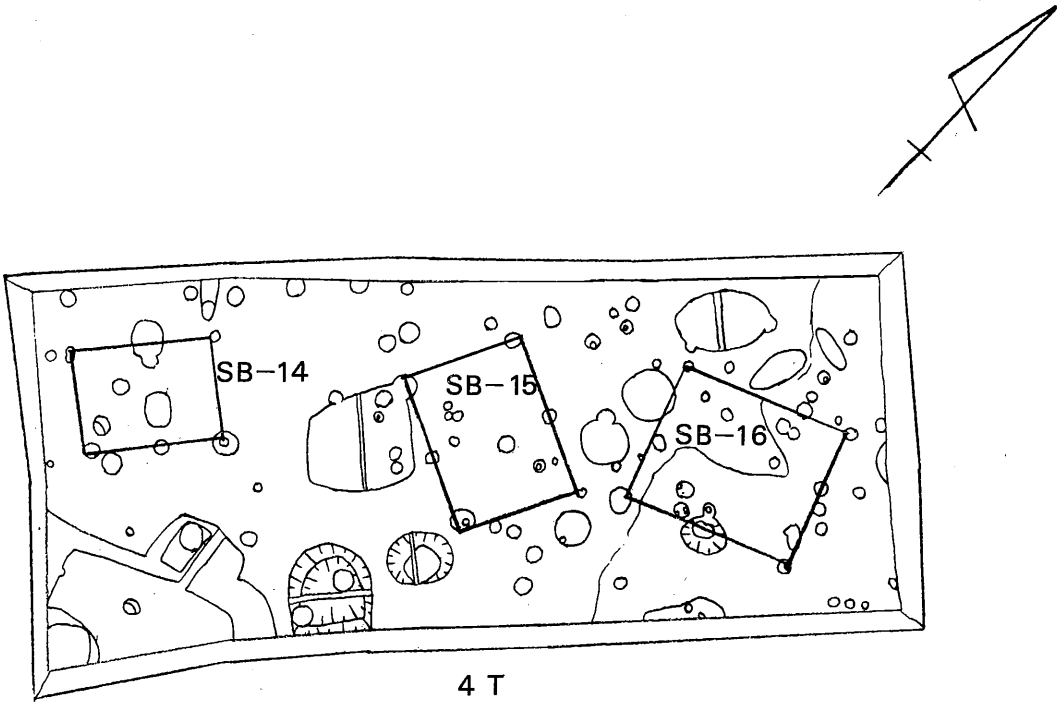


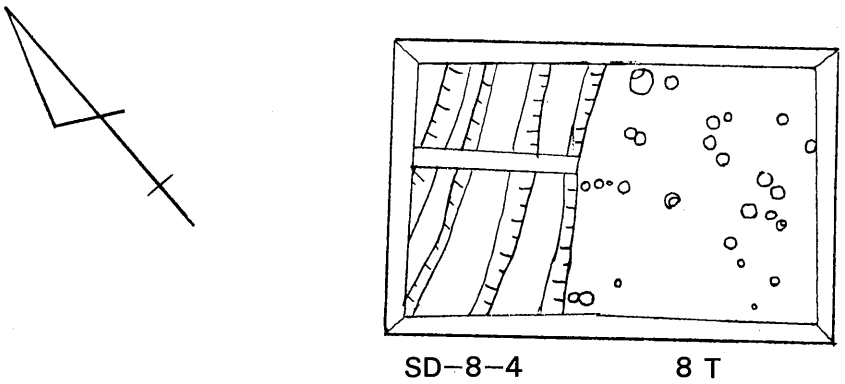


図版５　馬場遺跡３･９トレンチ遺構図

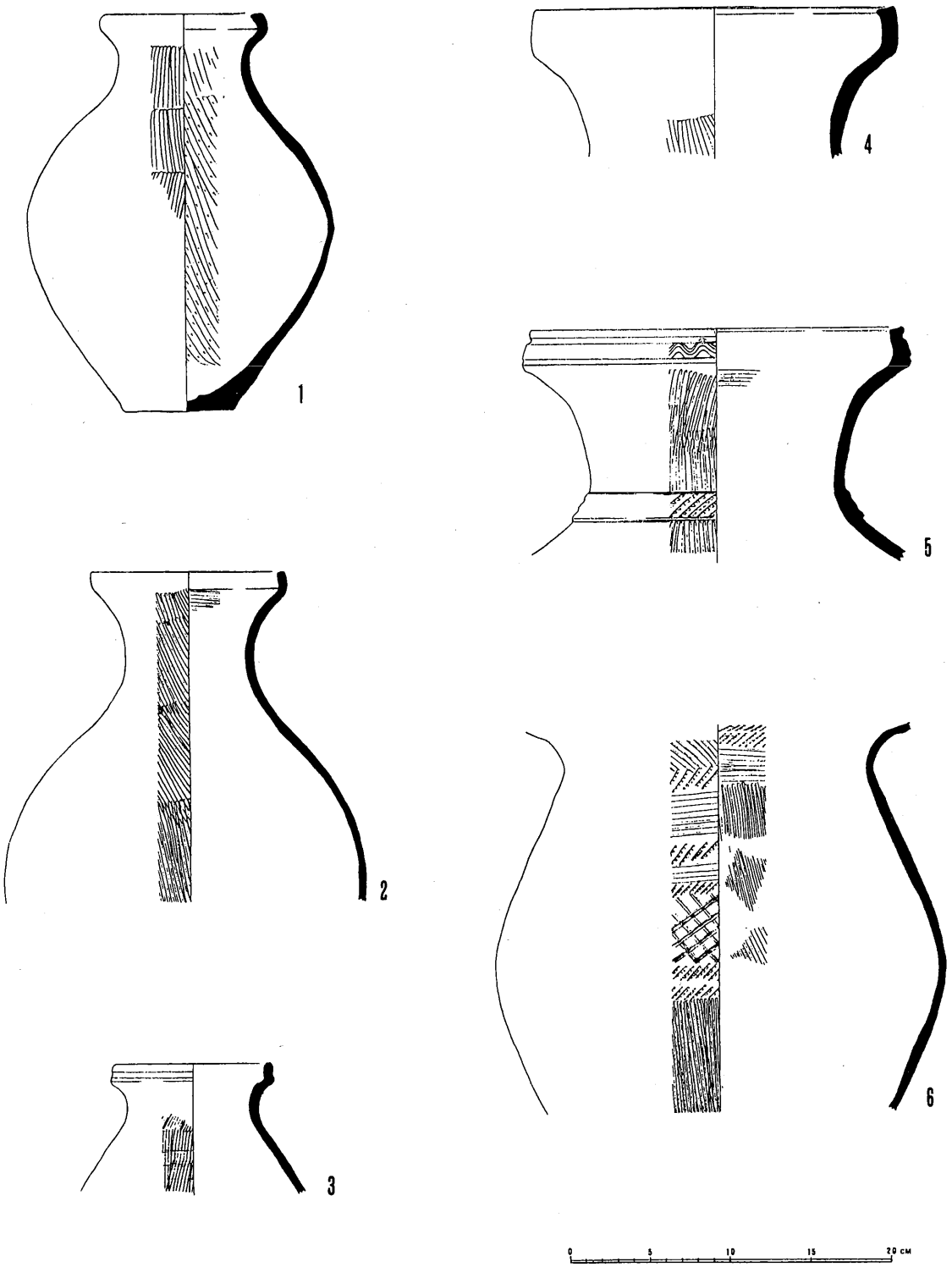


図版6　馬場遺跡5･7トレンチ遺構図

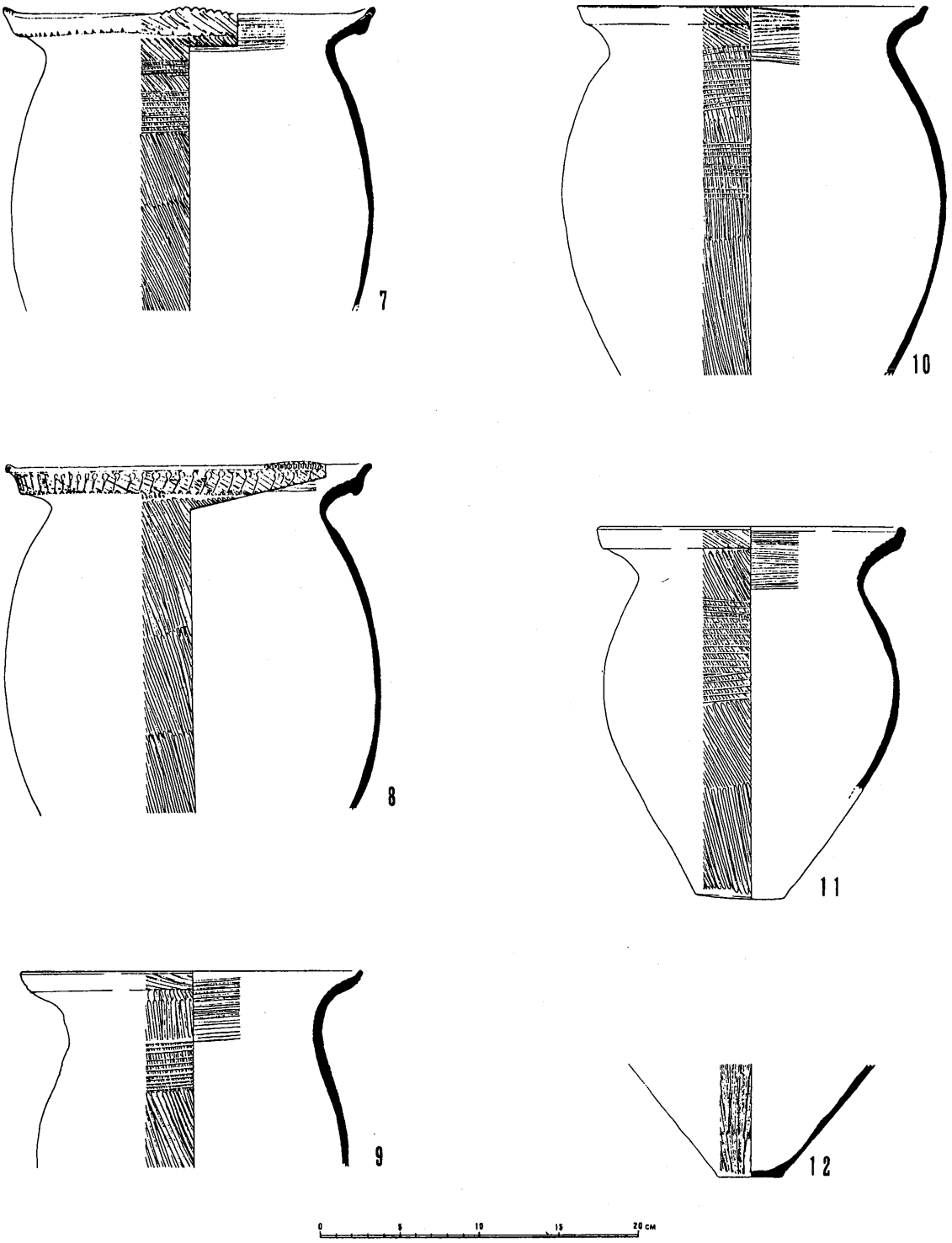




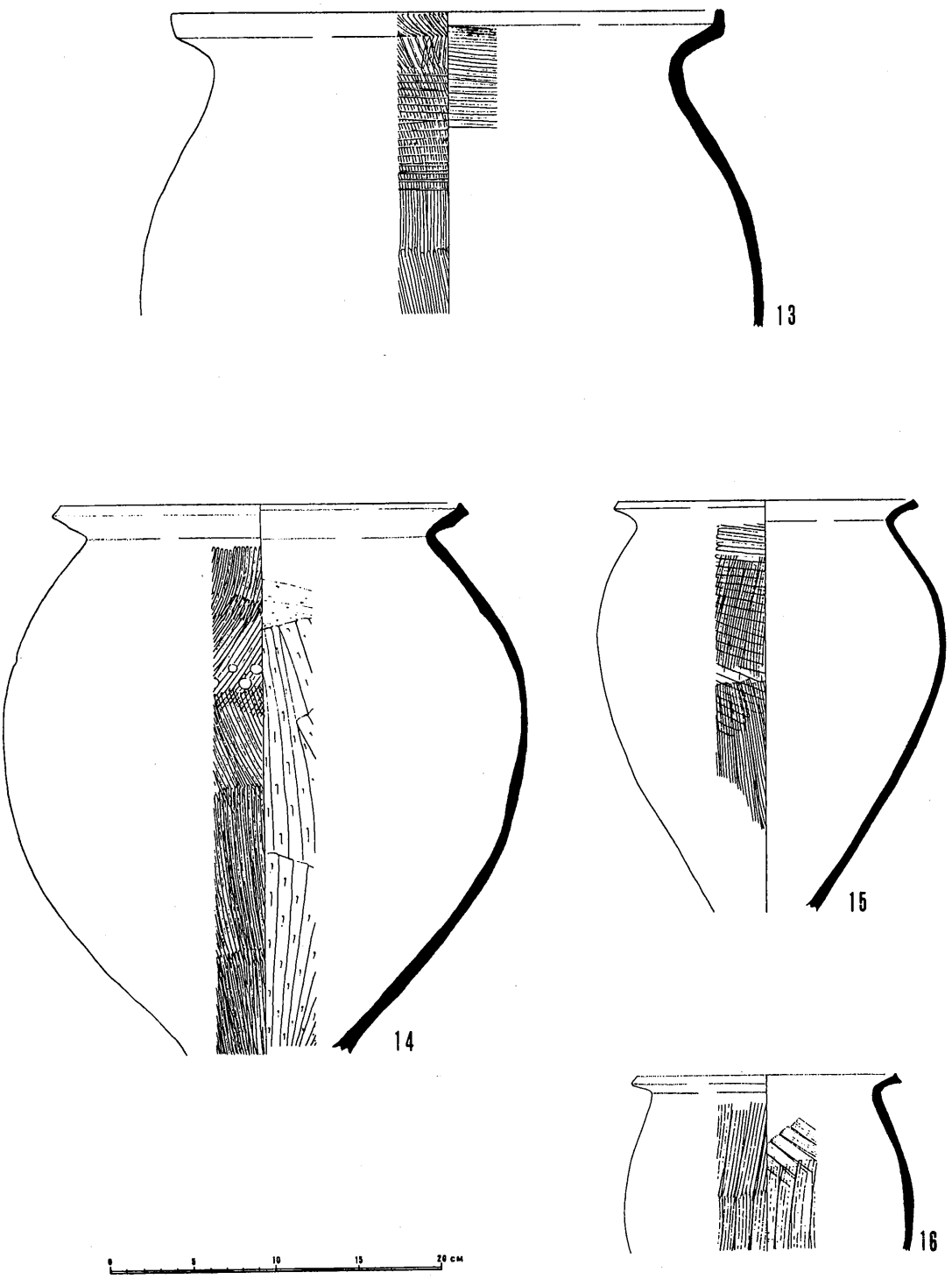
図版７　馬場遺跡４･８トレンチ遺構図



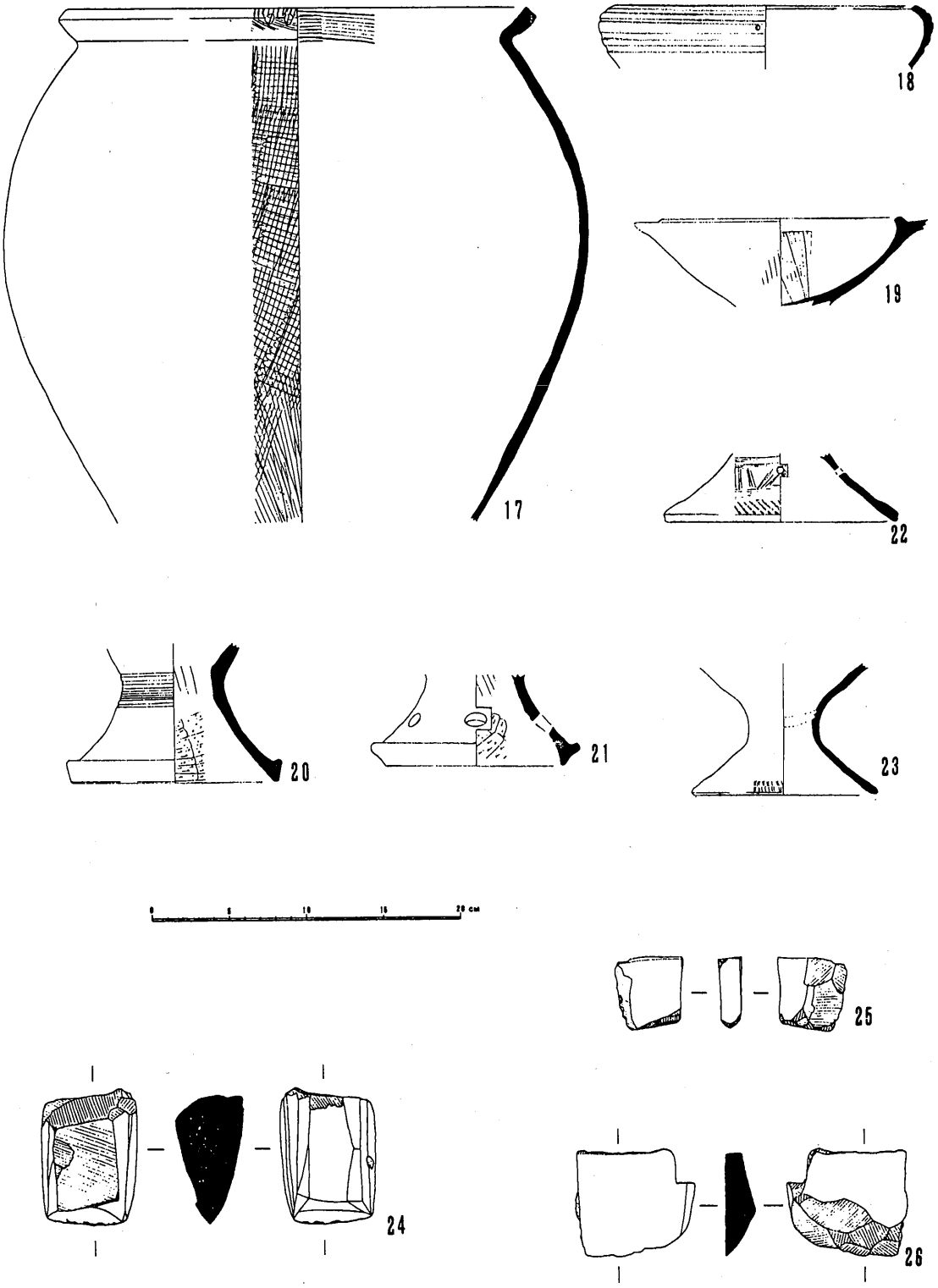
図版８　馬場遺跡出土遺物実測図



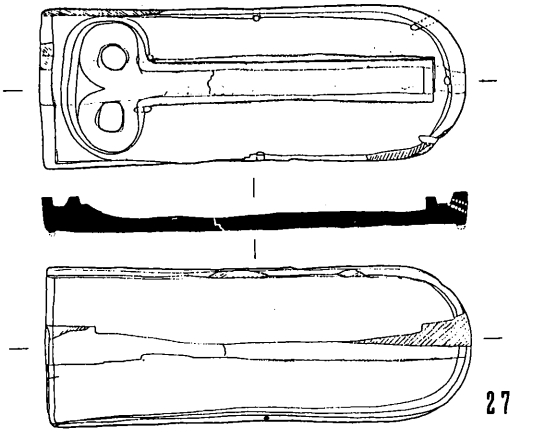
図版９　馬場遺跡出土遺物実測図

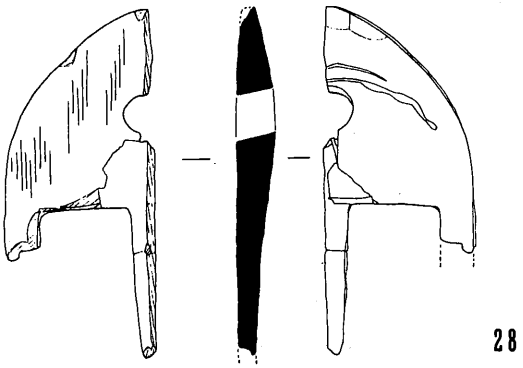


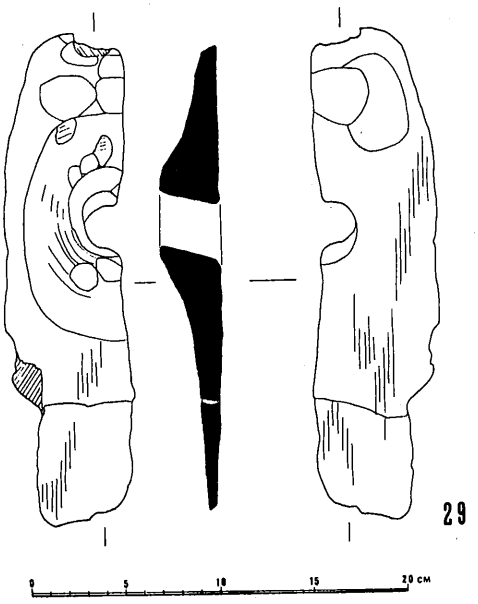
図版 10　馬場遺跡出土遺物実測図



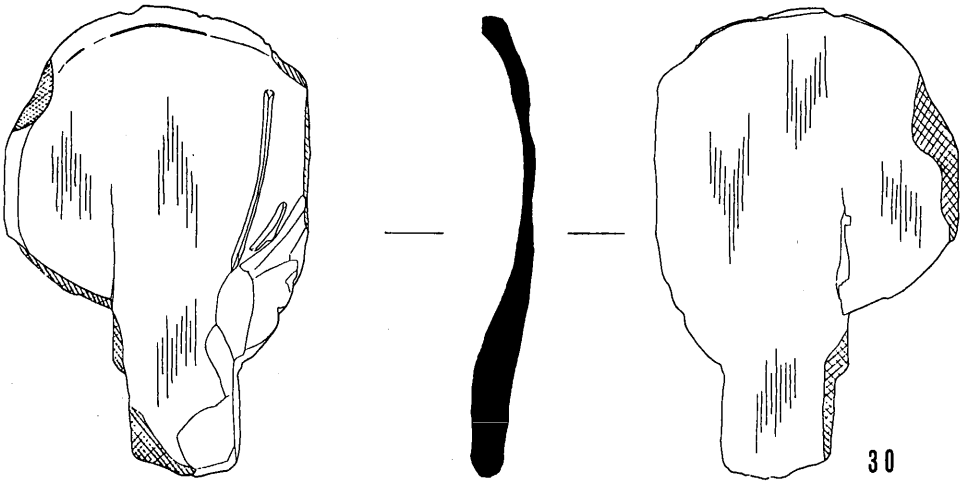
図版 11　馬場遺跡出土遺物実測図

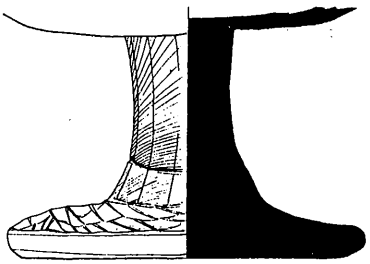


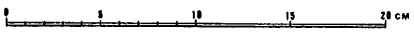


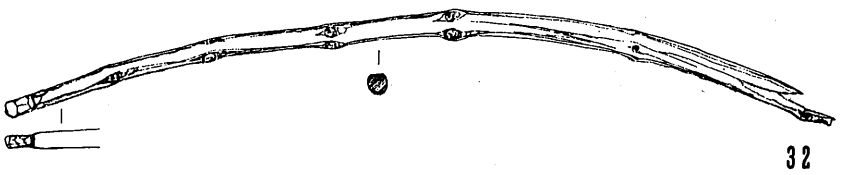


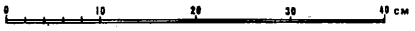
図版 12　馬場遺跡出土遺物実測図



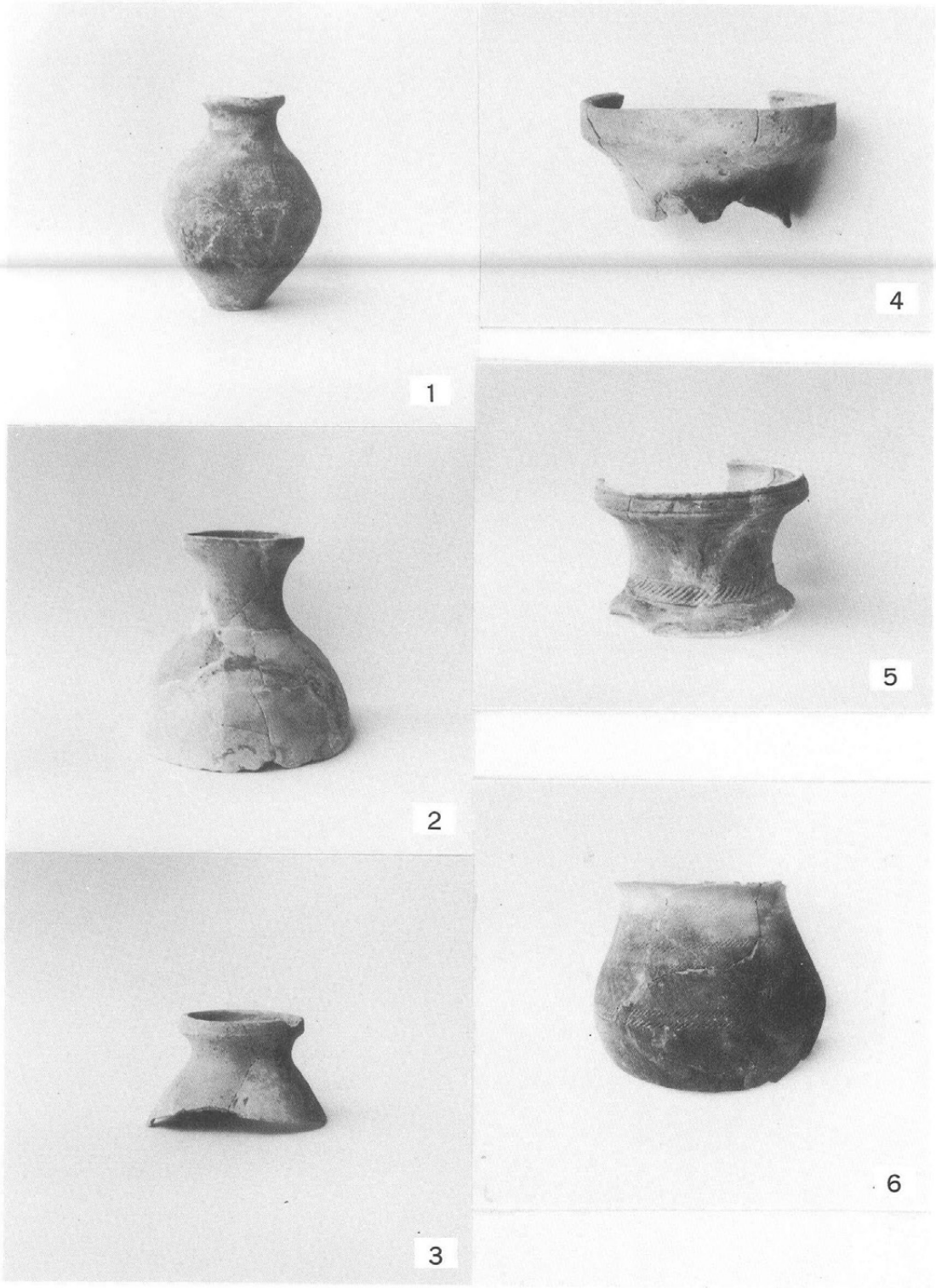








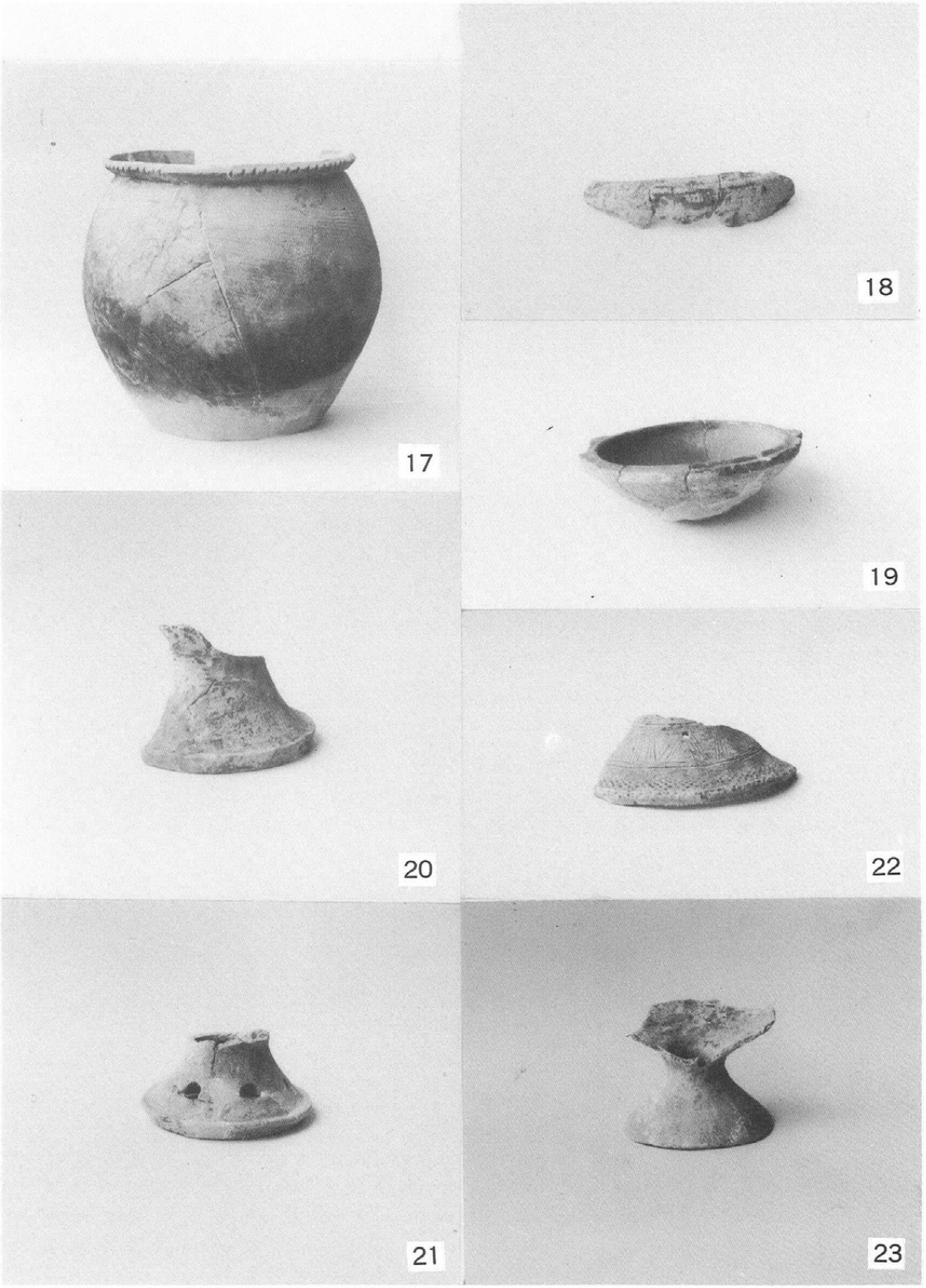
図版 13　馬場遺跡出土遺物実測図



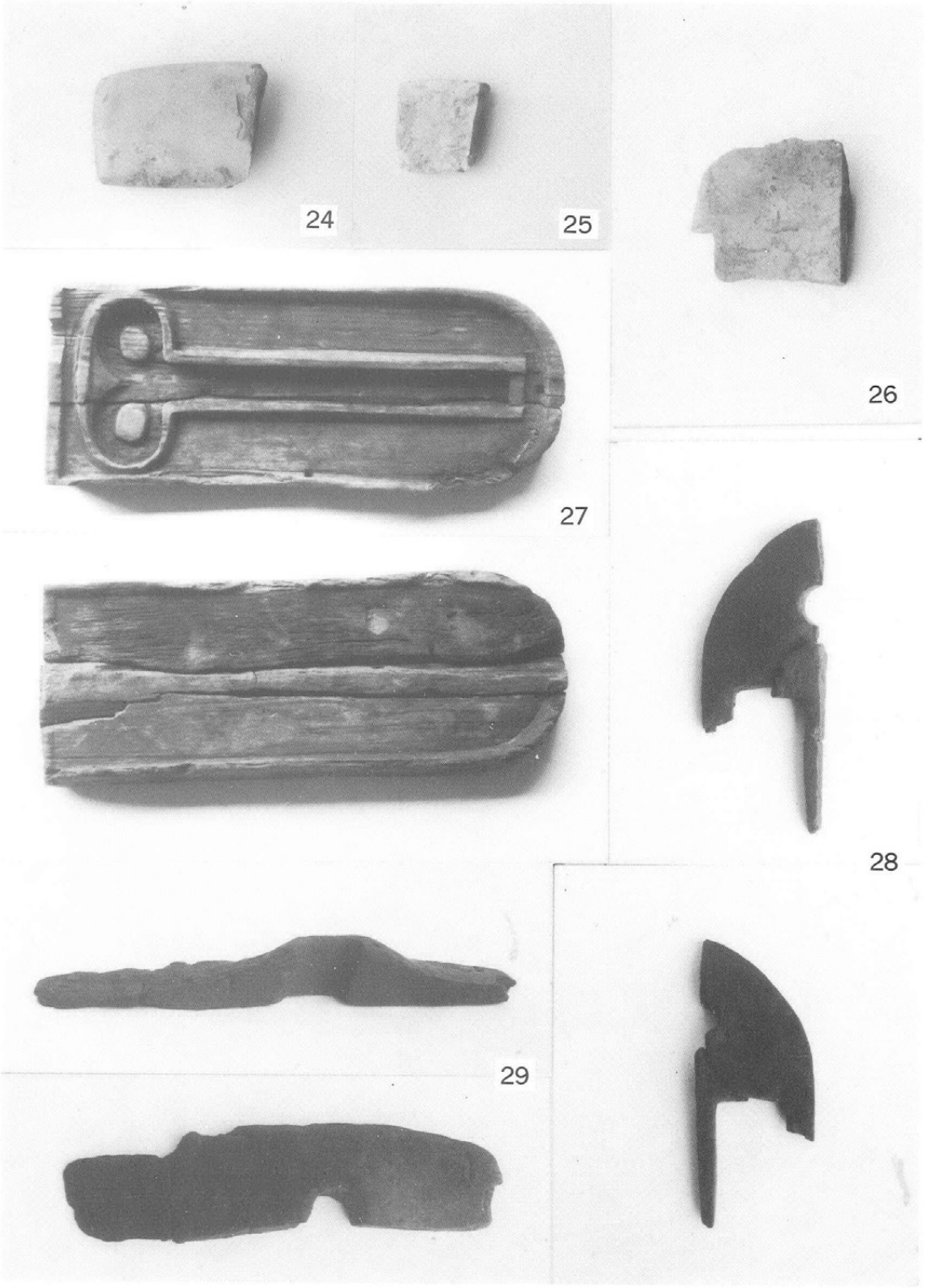
図版 14　馬場遺跡出土遺物写真

図版 15　馬場遺跡出土遺物写真

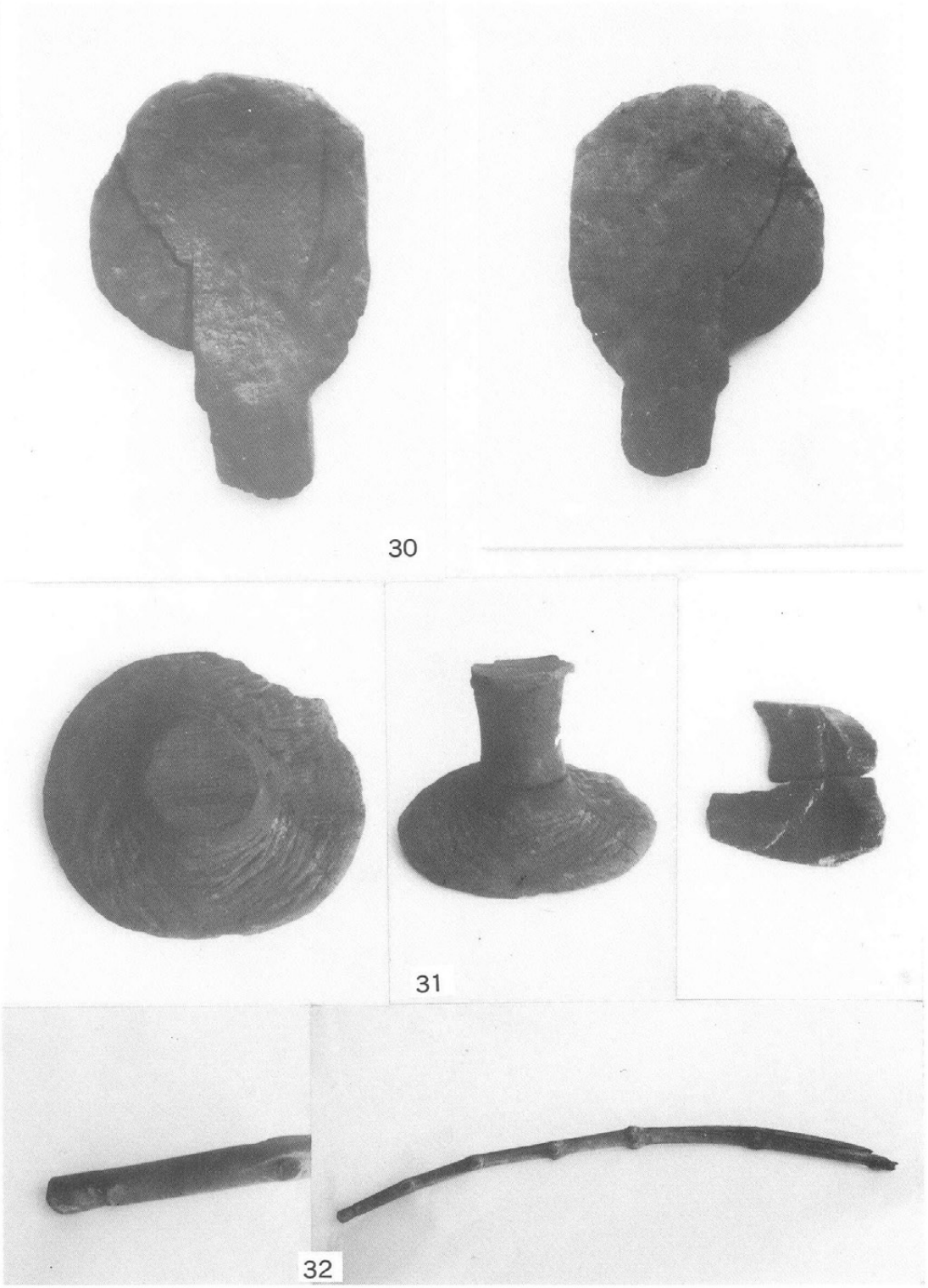
図版 16　馬場遺跡出土遺物写真



図版 17　馬場遺跡出土遺物写真



図版 18　馬場遺跡出土遺物写真

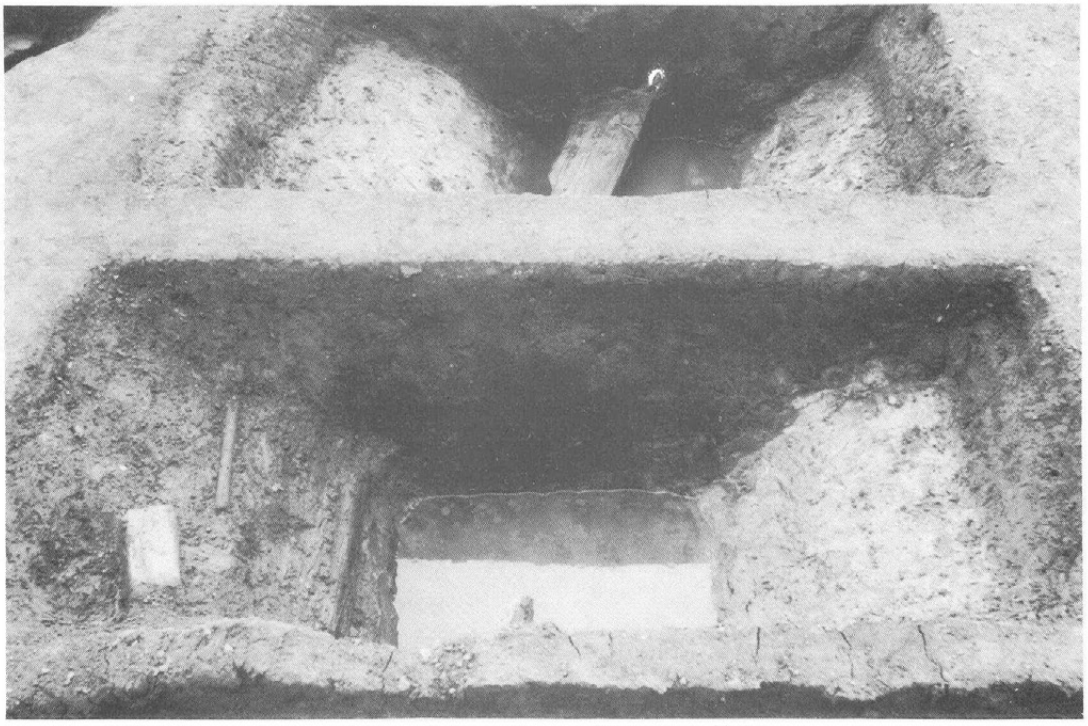


図版 19　馬場遺跡出土遺物写真

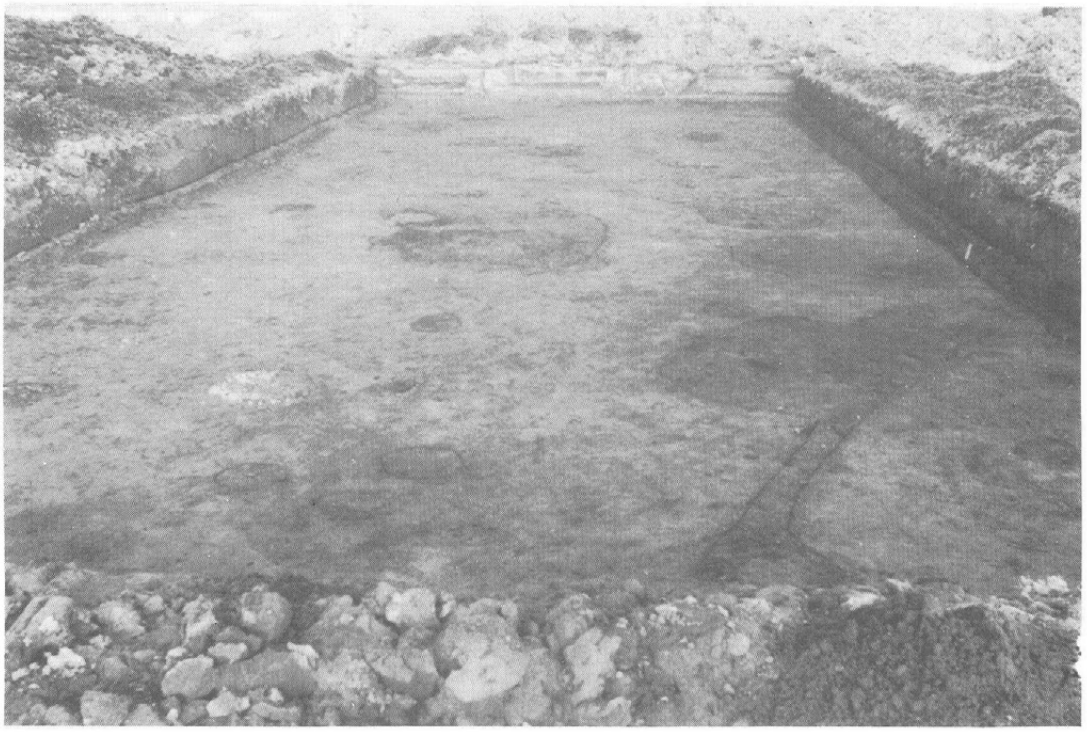
２Ｔ遺構掘り込み状況

図版20　　２Ｔ遺構掘り込み状況

２Ｔ　ＳＤ－２－１遺物出土状況

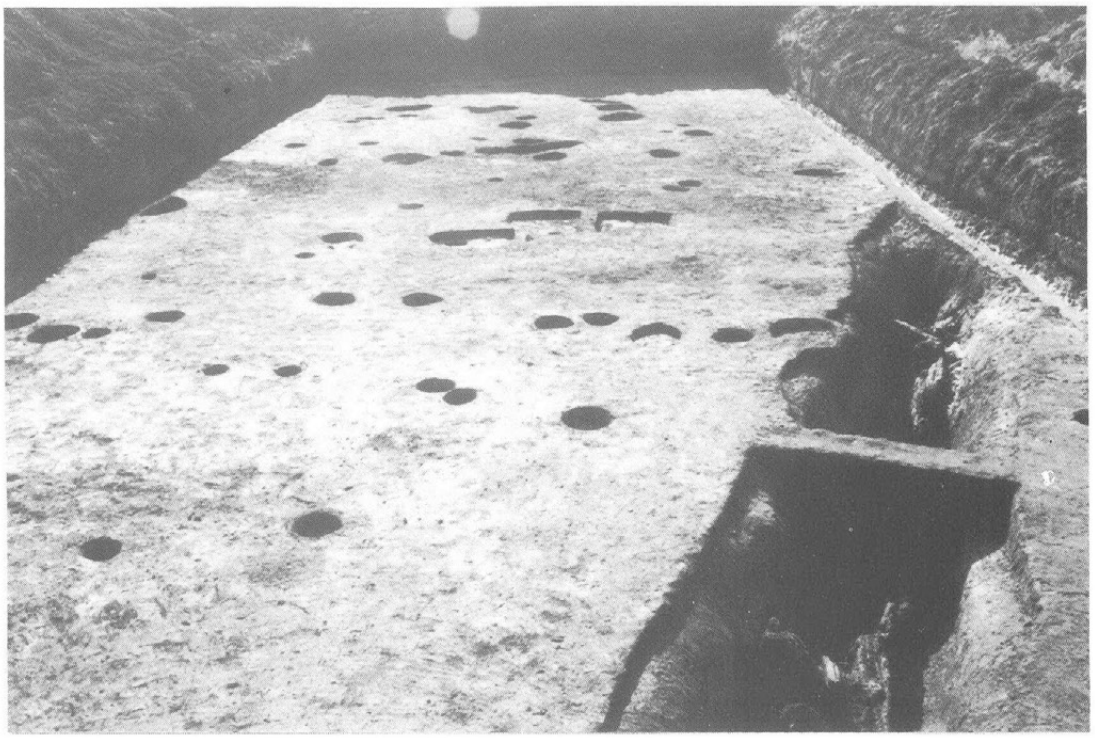


図版21　　２Ｔ　ＳＤ－２－４掘り込み状況

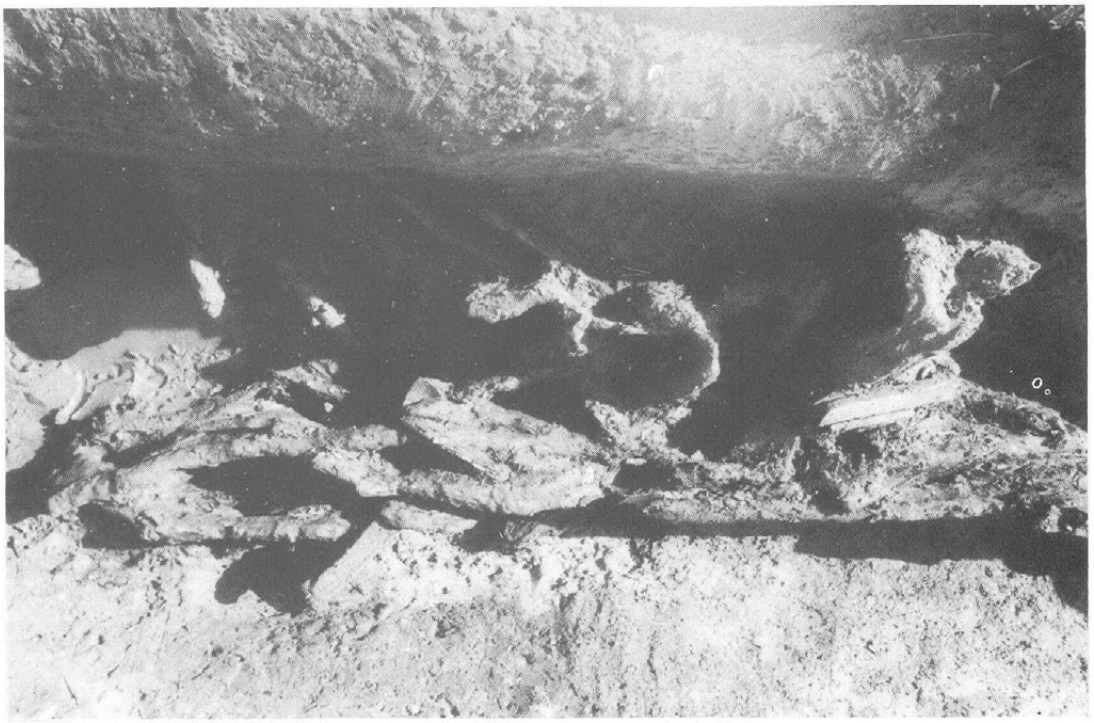


1Ｔ遺構検出状況

図版22　　1Ｔ遺構掘り込み状況

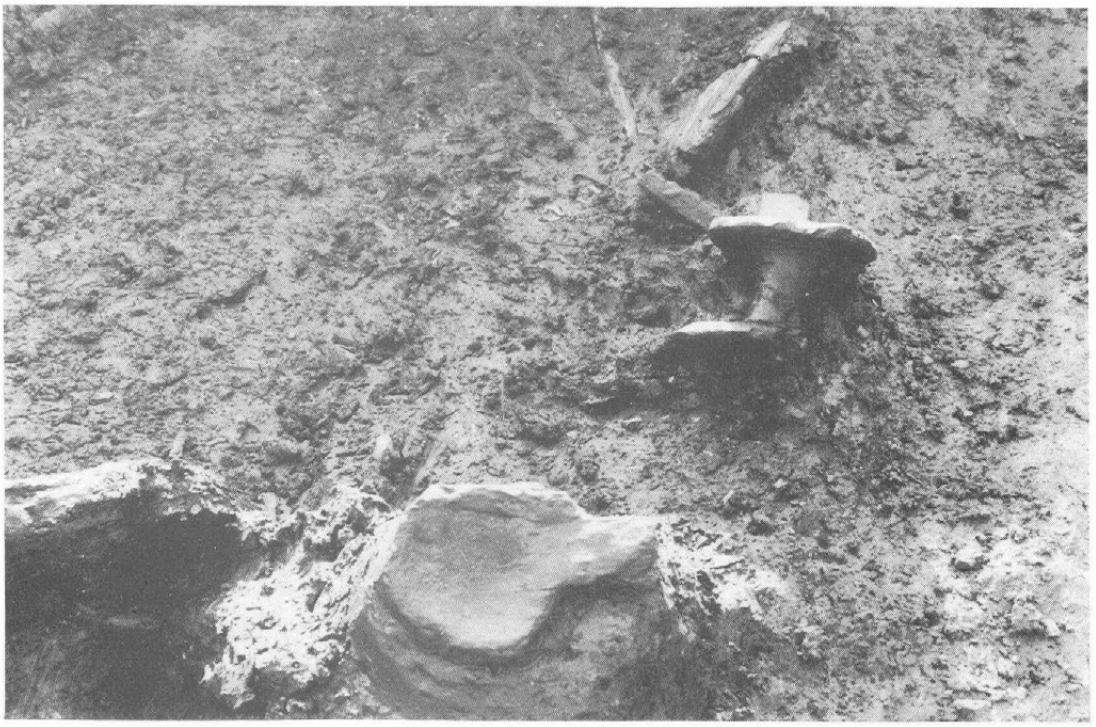


３Ｔ遺構掘り込み状況



図版23　　３Ｔ　ＳＤ－３－３遺物出土状況

9Ｔ　ＳＤ－９－５掘り込み状況



図版 24　　9Ｔ　ＳＤ－９－５遺物出土状況

彦根市埋蔵文化財調査報告第13集

馬場遺跡発掘調査報告書

1988

編　集　彦根市教育委員会
発　行　彦根市教育委員会
印　刷　㈲つくし出版印刷

馬場遺跡

昭和63年3月

彦根市教育委員会